寒燈夜話

小栗外傳

三編

四

へ13
3919
16

へ13
3919
16

雪燈夜話 小栗外傳卷之十四

東都 絳山戲編

第廿四編

勇威龍を走して亡鏡を復せ
仁惠士を憐みて旧宝を見る

こゝに小栗助重は。將軍家より。一色詮秀と対ろぐき御教書とを賜んと。嘗て主従京師に出しうと。義量は薨去ふゝり。世間の人公為氷沢踏のごとし。物騒くあり。便々なき人もなく。皆く世の動静を窺ひ。義持公の法會寺青蓮院の門主義圓僧正。思慮あり。義宣と号しまひ。征夷大將軍を称りし。世人漸く穏みなりけるゝ。幾程なく。京都騒乱れ。中不和ありければ。世間再び不静溢るゝふきり。抑京師確執の盛觴ゝ。前將軍義持公去る應永三十年の三月。征夷大將軍は職を辞し。位を嫡男義宣に

箕裘を譲り。四月上旬に御落飾あり。世の道直静に天年を保んと思召しされに同三十二年二月廿七日義量公世を早ふし給ひぬ。いまだ御齢十九歳。道号ハ翠山法名ハ道基長徳院殿と申奉る。僅に含めば梢の花綻び出るを待ずして忽ち一朝の風に散失給ふぞ憐なり。天下の憂ひこゝに極まる。されバ暗夜に燈火を打消したる如く御父義持公の御嘆きやるかたなし。猶さら外に御世嗣に立給ふべき公達も在まさゞれバ。御心裡ひそかにあらかね御物思ひに。代を知らしめす君なくてハいかで天下を治む事とおもひわづらふに先祖なる氏公の定めおき給ふこともあれバ。鎌倉左馬頭殿の御公達。賢王どのを御猶子とし。天下の権政を譲り給はんと管領已下の輩と御内評ありけれバ。管領畠山尾張守満家を始め山名赤松以下の諸臣等此事然るべしと申す人もなく。兎角に月日をおくるうち。義持公ハ御物思ひの積りてや御心地

例ならず悩み給ひしが。正長元年正月中旬より重らせ給ひ今はそや今世の終を必くぞ見へ給ふ。同十七日管領畠山満家石清水に参詣し丹誠の勤行をいたしける。されバ今前将軍義持公御病いと危ふく一朝の露とも消させ給はゞ天下ふたゝび乱れ万民の嘆き如何ならん。僕才不肖なりといへども管領の職としていかで是を患ざらんや。抑当社ハ源家守護に在せバ。仰願くハ愛愍をたれ給ひ今しばらく御処の二人の公のうち何れか君とし然るべうらん只神慮に任し給ひ。御世嗣の公を定め天下の人を救ひ給ふべし。二人の君とは前大樹の御舎弟青蓮院の御門主。今一人ハ鎌倉殿の公達賢王丸殿也。此二方の名を記し。神前に捧奉る。其の宣きを示し給へと是を御鬮とし。丹誠をこらして御鬮を取こと三度に及ぶに。みな義圓僧正の御名のみ出ける。是ぞとに神慮に叶ふ処と夫より下向し柳営に還君を

そなり。然老臣ハ斯と生るなれハこの神あの指ところ。いづで疑ふべきやハと。承定これを一度をかくハ処に翌日午刻前ハ軍義ハ行ハ四年世四ハく逝去しぬ。

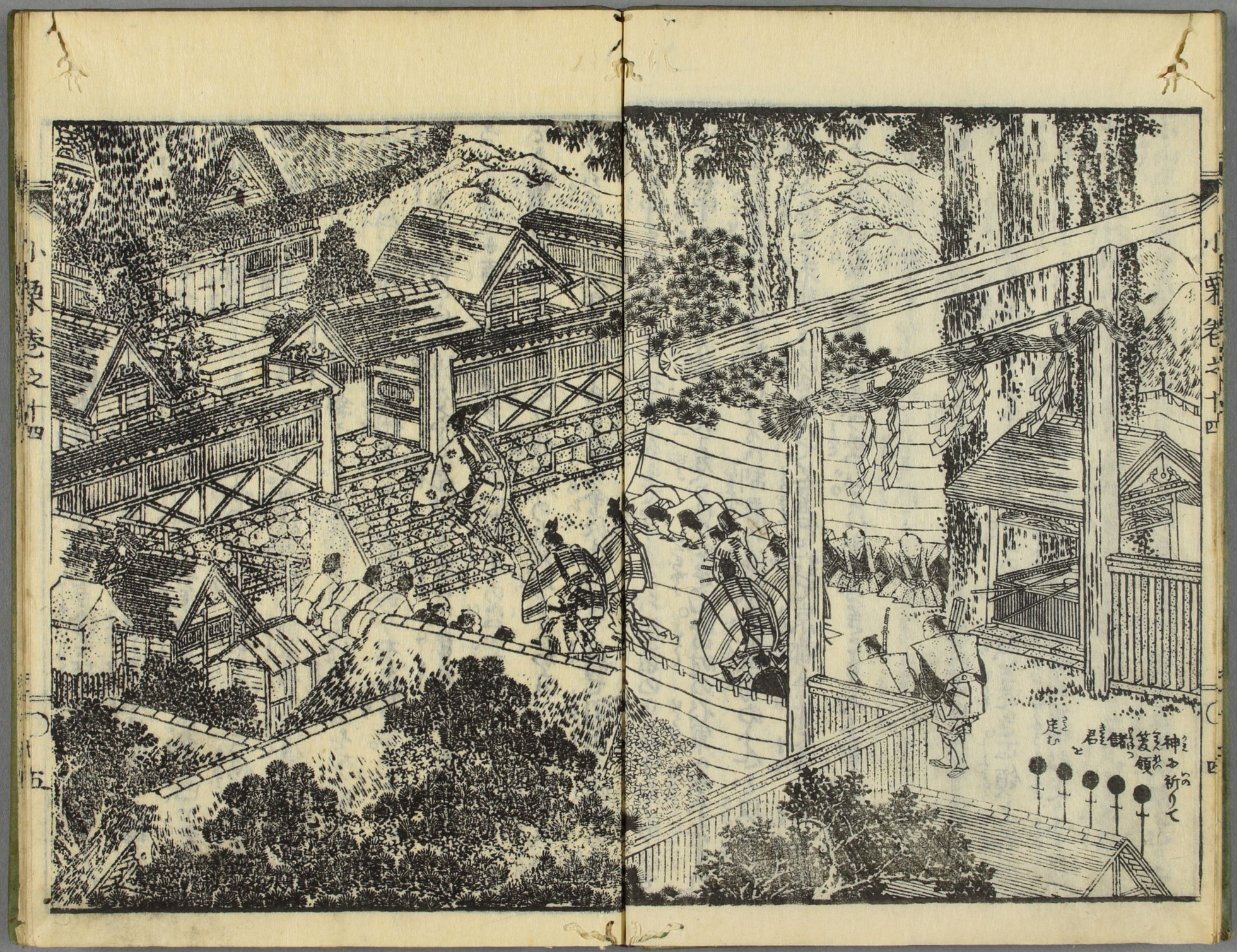
同二月十一日ハ義圓僧正を還俗せしめたまふ。義宣ハ号して若ハ軍義ハ行ハ。同母の弟金吾ハ初め青蓮院門主の室に入て出家しぬ。義圓と号しなり。天台四明の法水を汲て。自解仏乗の妙理を窮め止観三諦の教門を開きて。然法実相の深意ハ達し。内外二典に通じ。詩歌文章ハ賢く。一山の明師となりぬべきに。帝かきり好く信敬まして。大僧正に任じ。准后の宣旨を蒙り。門主の怨に入て天台座主と成りぬ。俗性とハ僧位とハ。今還俗ありて。天下の授を挽ハ。仏の不思議なり。まさしく。陳座の宣下あり。小除目もとゝのハれ。従五位下に叙し。左馬頭に任ぜらる。今年三十七。斯波左兵衛佐義淳再び愛願に任ぜらる。京都

ハ張り。然ハ初ハ。ハ永享元年三月十五日。参議兼左近衛中ハに任じ。征夷大ハ軍に補せられ。名を義教と改め。従三位に叙せらる。ハ能出仕の輩。ハ行ハ人の作法。みだりがましきを削て。外様何公の族。大名然ハの行跡をさらに禁じ。自ら正道に復し。皆篤実に成られぬ。ハ義教ハ。風俗淳厚静謐の世とぞなりにる。ハ軍より教に既に世を継ぎ。天下の政道を執行のせ。及び鎌倉の左兵衛ハ持氏に遥に此事を。世に人もなげ。法師をハ軍職とハ。ハ足ハの乱ぞ。

若京都ハ軍家ハ。鎌倉より。これを継と。上祖尊氏に定めなべ。ハ京都を背く。ハ崩れ。ハ徒昔基氏公逝去の後遺言に。氏満。波兼持氏まで。京都よりハ元服ハ。ハ軍家の偏の一字を賜ハ。這回ハ氏ハ嫡男。賢王丸殿

元服の沙汰ありしよ持氏公京都を背くの意頻なれば世くの例ふつゝ
古八幡宮の住例よ任せんとて鶴岡八幡宮の住宝坊もて関東九
どの初冠せさしめ義久と名号ひろ執行家政安房守憲実是を
大きう敬ひ儀ふ少ふ劣り持氏公ふ京都君氏守護し
元弘建武の乱を静め天下を一統しひ将軍家ふ京都ふ
ちゝし五畿七道を治めふ勢ふ関東ふ遠鄙ゆて王化も届ふ
きて六乱逆の徒あるべりて世次男基氏公を鎌倉ふ
治めさしふこれ昇平を長ふなりんと討滅されば代く甚祝を失ひ
頻金の住嫡男を京都よ上り将軍家を烏帽子親ひ住一字を賜ふこと
なり。然ふ今君先祝の住例を辞し櫃よ賢王丸殿を鶴岡八幡宮の住坊
ゆて住元服あゝ住名を自ら付ふ。これ何の所為ふや京流公ハ

親子の中ふ此度の半将軍家ふて住ゆ南家の住ふ
怨ち住中住ふ和となり。世の乱よ及ん住ふ。当時の将軍家ハ
角まれ住先代よ定めもれ住る住制君の住代よ住変易ゆんと以の外乃
住ゆふ。急ぎ先非を住改めあゝて。先君を打て京都よ上ら住ひ元服
あゝんゆ南家の栄ふ万民の歌ひ。これふ過ぎてとゝ尚変くの
古くを陳じ。諫めまゐらせれど左馬改どの霊ひ聞ふ
憲実を疎じ。出仕せんとも元番しひ
居ること影護。永三十二年八月十四日山の内ゆ鎌倉を退き下領上野国
白井とゝふ所ふ移りしひ一族なりゝれ扇谷の家政治綱ふ補佐定ふ子息政
行左左衛門尉同左ゝる分憲光ふ次男憲信。その外永井三郎入道那須三郎
小山田小四郎なんどの人く跡を慕ひ上州白井ふ行加る。左馬改殿是とて。


小栗巻之十四
神を祈りて
笠領
君と
定む

いよ〳〵怒りをなすと一色左京大夫殿を巧み奏し申されば
左京大夫殿怒り給ひて此上は憲実を誅せんと俄に関東の法令を觸れて
軍勢を召し集めらるゝ結城六郎持朝は前年持氏公の御事色と紫ゆり
而領結城に蟄居してありけるが今度の御召の数に入れこれ伺ひ見ん
知らぬ体と君の命乗ぜられあるべきと。譜代恩顧の郎等を引具し一族を率
ゆ走参りたるぞ持氏公斜ならず喜び給ひ急ぎ人数を召し集めて
今回の一件を語らるゝに持朝大に驚いて。
訴へ処よと猜をれば諫めんと思ひ君の御事色止りなば光景
なるべきや人の事なれば穏便なる体にて消べきと
も何とぞ故なくして我一人の力にかゝるべし。宜敵金
あらばみなべき申うあらんと君の命に従ひ斯て関東の諸公の面々

ゆ知よ頼ひ走参る軍勢。進日集ひ参ずる。鎌倉中に満〳〵あり。
左京大夫殿これを少憂んで表ひ給ひ。さくべきなら家扶と討る
べしと一色詮秀同附家を先手の大将とし三千騎にて上洛せしめ
ゆ。おんなども五千余騎を率し。瀬谷を打立武蔵国高安寺に陣取る。
安房国此より馳せて大に驚き嘆息し。天下の大乱家の安否今この時に
極まれり。此上は力なしと早馬を立て京都に馳せ参じ軍家に申せ
俄に多勢頼参臣の人々を召し集め浮定あるべし。区〳〵にて一変せ
左兵衛督義淳斯を出て云ひ給ひ知謀一世に秀れ熟〳〵思惟
を廻らし今君代を知らるゝ諸侯の心服も浅られど。みだりに兵を起さば
乱世付入り奪ふべし。某が存ずるこの諸侯の命せず近の侍士の中に
ぞき人を撰び。これを大将軍に選ぶべし。又別に出遣習

のうち大きなるものをして藤倉より下しまゐらせ給ひ氏をよく綸諭し給ひ和睦成整ひし
まうこと万全の計なりとや。と悦る処なく速に君臣の義を正せる
ことこの儀ことに大切なり。とかの藤倉大夫をして家校を殺さんとありしかども古
家校稲秀の次男。中務大輔は房い前年父禅秀乃亡び〜后京都よりまり。
軍家の近習に仕へ今度の伊豆の国の義を何てやうなる。
左馬頭殿の正しい父稲秀が無法なるを聞て憲秋
教朝の兵人前年の内を家を滅し本と果たる。剰え
藤倉人の支えを恨りまひ西領を石放されとり。愛ふ所も公を〜ふ。
兄弟の僕仕へ〜も世で。今日まで〜ことと云甲斐なく〜ご世の
乱をたくかり思ひ忍びてゆ今藤倉殿の光景京都を拝さること
私よ承る實ならん若し家校憲実を殺ひ弓矢を取ん甚だ
分不肖なりとの人ども。一回藤倉殿よ對ひ弓矢を及ぶ。父を對〜く孝なり。
且憲実は一家〜。これを殺ゆ我〜足彼のるのほどふ。ゆられは併さまを
業〜〜〜速て拉ひ。澄代奢好の輩を拒ぶ。若干の軍勢もいえん。
其勢ひを将て家校を殺ひ父入道が泉下の憤りを晴〜ゆたしと嘆られば。
扨軍家も其志を憐よ。おのれ仕へ〜ふ藤倉の政道始終正しく稔。
関東の法困穏なるまこと今既よ乱邦とまなれり。さまで速ゆ勢沢下〜く。
扨を討てその罪を糺さんと想へ。我世沢治るの始ゆ〜〜みぐりよ軍勢沢
既さんと欲ふ〜〜。よりて戈角あるのをして家校を殺んとするふ。そ人を
ひとしてを若〜くありけるが。汝〜くも清ふりのう彼。望よまるに扨さまを長甫を
一刃の力をもて藤倉を傾〜んの兵東国。たゞ家校を殺ゆをりて仏〜〜〜〜〜。
若関東の法扨持氏を敬て力さるりのあふ甚だ速ゆ藤倉を亡ぼ〜。

宿志を遂よと。蚤は旗のふは教書をそへく賜はしぶ。拓房かぎりなく喜び。
ふく君恩を感佩し。当ぎ家を選りて只顧関東へ下る准備せりこゝふ
小栗助市の皆く浴外八塩山の辺ふ忍び居るしが関東の乱状を聞ふ。
家扶打成。彼軍家の内書を直て憲実を殺ふはしを笑いふもしてその
まふ属し憲実の討ふまふ對へ。一色を討く手負の宿志を遂ぐやと其
便宜を索々り。彼るよ近ける天下旱して加民川の流も涸るゞとなれば。
浴中浴外の井悉く涸るれが小栗が旅館の裏ふ一つの古井あり。常ふ水
盛のごく清くて其源さ斗ゞしとぞ。彼れども此井ふ神あるよし沈云く。
汲となくてありしが今旱魃の付られども水尚溢くゞるなるゞ近隣より
汲とるの多しされども人く乞て汲故ふや溢るものもなりしふ一日乃夕
小栗夫婦旅宿の前栽ふ出く。垣の外面をうちゑるふ隣家の婢女

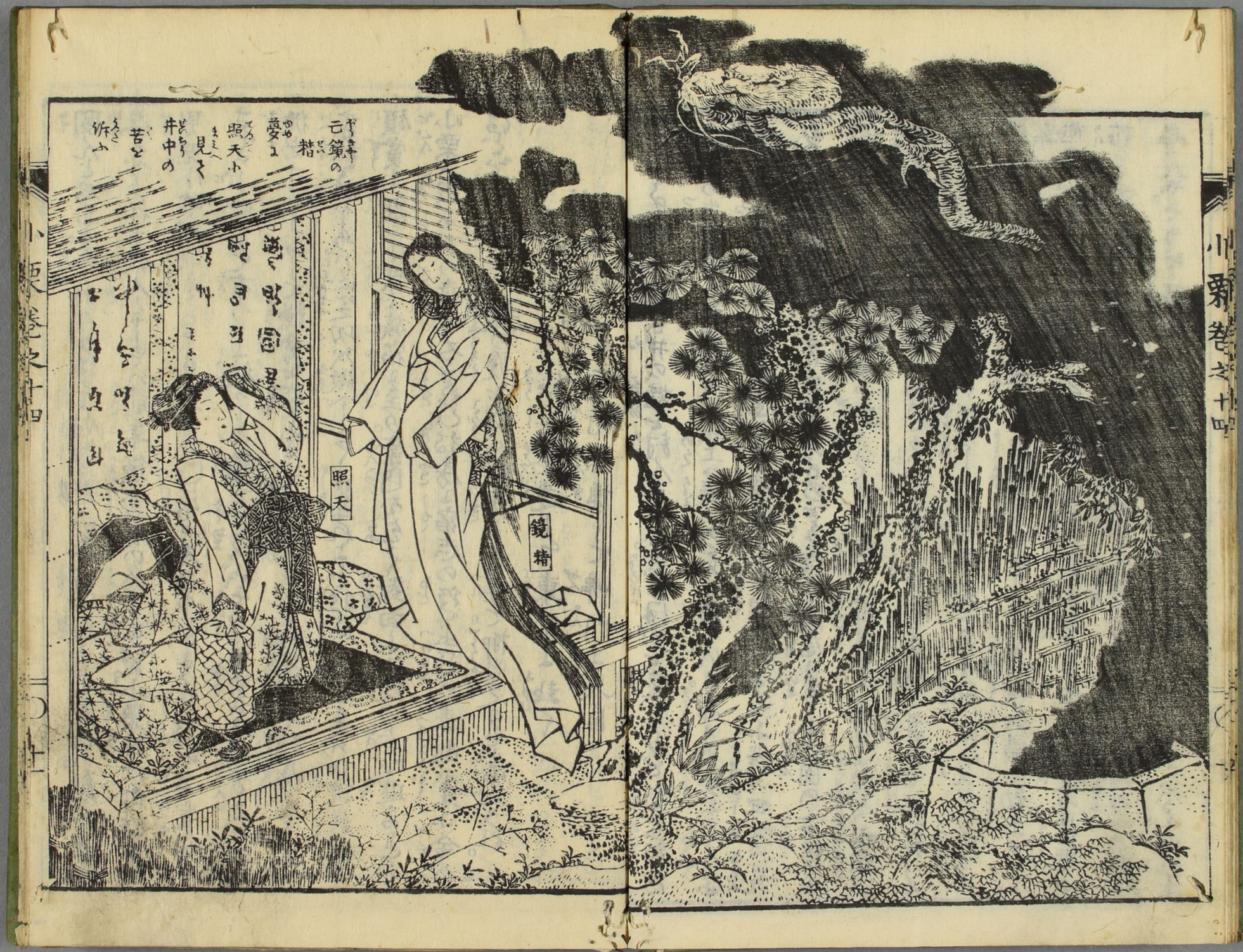
水を汲んとし彼井ふ望みるるが何をうゑん水ゞが汲すて井の祠を窺居るを
何るゆゑと尚ゑるうちふ忽ち身を離して井ふ隧るり。夫婦ふ驚る死人沈
ゆゞふ近隣らち集ひく。助んとされども及ばゞ。せめてふ生屍を汲まく井を
汲干んと。終日人力を尽せど水涸ざ必斯さること三日ふ至れども此ふ水の
減ぜざれば。人く恐怖し此井ふ水神の在を知るゞ。みゞるふ汲ふ依て
斯る祭を稟しるゞ。屍を汲んとて尚強く汲ば又ふるる四討ふる業らん。
不如此人ふ対て足より井圍ふ垣を結て人をして井ふ近けるを池の
庄司ふこれを怪しを夫神ふ人を助るふ代て崇ひなるふ今天下旱し水ふ代を
患ひ。邂逅此井の水を汲しふ。いゞ崇をなしるゞ。必定神ふあらぬ妖
悪の蛇なんど居を下しなるゞ。此后怪し死のを見ば忽ち打殺しく妖沈
除んとこれより日毎彼井の妖を窺るる。両三日をるゞ夕晩井の垣ふ辺り

年齢二八ばかりもこえたる女の甚美麗なる。白綾の小袖に緋の袴ふくらかに結び垂れ居れり。庄司をよこて少し恥ふひくるさまの面ばせ明珠のごとく輝き。絳唇白玉を含む。眉は楊柳のなびくを欺き。色は芙蓉花の姿と肌は雪に光を添ふごとく。腰は絲を束ねしよりも細く。雲間を分て睦出る月こそ尚美しく。蓬莱宮裏の神女もあらじと。瑤臺月下の仙娥天降るやと。石心鉄肝の庄司も。恍惚として夢の如く。蒙朧として醉るごとく。荒然として言語なく。眼を付貪眼く居たりしが。さすが知勇の壮夫なれば早く放心を収め。忽ち悟りて想ふ。這的古井の妖精にて。形変化して人を欺き惑はすなるべし。ゆえんなくんば。何ぞ妖を除んと。躍かんして拔打ふるに斬るべし。怪ひ給ふ姿火なんどを流ごとく。ほこ入もせで消失る。庄司大に憤り。いざこの古井に入り。底を捜して討ん。と。若抵入んとせしに。時に日暮れぬ。

水中のあやもなく。明日を俟て入らんすのと。其夜をあかして止りしが。討洩しぬる。念ふ。終夜森も安で井の方を守り居たれども。初更より風雨甚烈しく。樹木を倒し。屋瓦を飛し。雨は盆を傾るがごとく。霹靂おびただしく震ひ。閃電白晝のごとく。五更の比もひとしき天霽れぬ。照天の彼辺を一人の女性立てり。屋しと。紀恋ふるに白綾の小袖に緋の袴を着る。艶麗なる体上着なく。思ひ入りげなる人なるべし。何人ぞと。問ふに女性拝首て云。われは妾は君を馴まつはしする鏡の精。前年三州二村山にて美堂の小かぐまを。后武義秋の澤に。少分没命て賊を森れ。彼を賈人を誑かすに。賈人妾を奪ひ。蠱惑と。此地方に来れば。る。去て古井の裏に隧入り。此井に昔より毒蛇住。人をとり食ふ。妾井に隧てより。只顧役使て食を弄せざるべし。彼が命に恵ぜざれば。叱責を

て混乱し甚苦痛を堪ゑ止ようなくして或ハ色とりて惑ひ。又ハ戦慄して騙し人を惑ひ溺ー入く。毒龍の食ふところ不借と。然るに門の人池庄司助長時日井の辺を通りしを。その知ふ所にて例の色とりて欺んと世こ知勇の助長毒を嫌と猜ー。一刀の下に殺んとせられ驚て恐ま逃失けるを助長是ふ〳〵に思ひ井こ入く妖怪を殺さんと毒龍を威を恐怖ー。昨夜俄に此地方を去く。其行所を知ふ妻辛苦を脱さり。爾あれ腥稽ふ憑へと。今井中毒龍居ふざれば少ー〳〵人力を用ひ。忽ち水涸らん。わぶ。井中の苦ーみを脱ら。昔のごく君の左右ふ侍し多ふ。さまに恩を報ひはゆくせんと云終りて立よと想ふ恍然として瞬瞬ふられ楠柯の一夢なれば。姫を奇異のおもひを色。助手ふ初と告られば甚不安て庄司を召ー。妻の夢中のものがたりを詳ふ笑ふ。庄司井の傍ふ〳〵。美人を

入ふるるのうにして今日井の妖を討んとて。志のほどを述ふるまで。照天姫乃爰中の告よ恰も符合とれば此上ハ疑ふべきよあらんと急ふ郎党の人ふ命せく井をあらーむふ。忽ち水涸るれば。千裡を捜さふ蓮の婢女の屍あり。其外白骨畳〳〵り足等のものを除く尚底ふ至ふ一箇の古鏡を拾ふり泥まみれこ形ぐふ定ふるふ絵ば熟ー濯清めて入ふよ照天姫前ふ小分へ出へる。八稜の鏡ふてありしふ。眼りるー告びて。ま匣ふ納めて秘ふて帰る。此ふ推ふ少しとなく。世よ入く口順ーふば。将軍家これを聞ー及ばれ近日の早天下の奠ふふより異くも君殿を怪ーひ高僧知識ふ勅ありく。西の祈をきの人と其験なくてありしふ。古井の形出現さるゆり。一夜の暴雨ふ拾ふる苗再生ー。萬井水ふ人。加茂川の流ふ人渡るごく。天下の喜び仰ふこれよ。ちんや。そも生旅人を奈何なる人也。古鏡何の縁由ある。古井こ沈えられを


亡鏡の精
夢ユ
照天ホ
見ス
井中の
苦を
訴ふ
照天
鏡精

関人と呼ばれて。命ありながらふ。その時一人の知る人あらで。遂に生くべき方なく。鏡のことを存ぜざる孫ども。旅人とやまさに前年鎌倉殿の召しに応じ。小栗孫次郎滋重が男児小次郎助重とやのうるよし。承り及びゆかしさに我教へ宜へと。さてか小栗ありて有つるよ。彼ぶことに豫て及ぶ。生涯の勇ましさ。万夫無敵の従者十人を供して。遠路を窺ふよしを。幸ひ。ふと出て。扶房ふさーそと。家板を敲かんあが。必定切板敲べし。さて。石見れと。扶房と命じ。ふ。山淀畏ねと頒賞し。程よ小栗が旅宿に至り。案内を乞へ。対面し。山淀の旨を述べ。小栗が弟ふ。ふの幸と大よ喜び。扶房と宿志の程を生涯ゆへ妻郎蒙ふ命のほどを語り知らし。八稜の鏡を携へ。扶房とともに連て。柳営へと急ぎ。

第九五編

窮士発達して東国に赴く
疑老慙愧して仏門に入る

且説扶房が小栗を伴ひ。柳営に参上し。速に入れ奉せしめ。その骨柄を見るに。威儀厳然として。進退節に中り。顔色温雅にして。英雄の相あれば。扶軍家いと喜びあり。其所扶房。助重が宿志の程を。ゆへあり。彼古鏡を上覧ふ入れば。義教公熟くと商ふ。ふと浮りて命を。汝助を何等の故をもて。此鏡をば。ふ。扶とるぞ。其面を。処を。お詫れと。山淀ある。助重謹で名武の家の長宝なりしを。鳥光横死の后。照天小倩。三列ふ。て。鏡を小ふ。ふ。武義丹。ふ。ふ。八陸山古井の毒龍の怪鏡の精。爰中の告により。再び鏡を。と。其要を摘ぶ。ゆへ上ぶ。夫婦が寿偶孝公。負恩の程を感じ。后宜へと。ふ。此鏡は昔唐の天室年中。揚州の参軍李守恭より水心鏡一面を。ふと。清室。ること。目を。鏡背に盤龍を。ふ。勢ひ動

もるゞゞ玄宗帝叡覧あつて甚異しゝ本寺の巻ゝ問ふに則ち勅答
去ぬる八月此鏡ハ揚州ゝ呂暉と申鏡匠のいぶ一日鏡を研ぎ白衣を
召られ老翁黒衣を召る童を倶して呂暉ゞ許ゝ来る先ず髮鬚
悉く白く眉垂て有ゝ至る自ら名告て我性ハ龍名ハ護と云へり
傍ゝ童子ハ玄冥と呼ぶ我真龍鏡を造ることを願ふ今汝ゞ為ふ
これを清て帝の意ゝ愜へんと申ふ此処を去るゞゞと戸外ゝ生ず小童玄冥ともに
爐所ゝ入り戸を高居ること三日也て戸を開きて呂暉行ゝ入ゝ爐ゝ渡
玄冥ゞ所在なし只爐の前ゝ一紙の書あり呂暉これを開ゝ曰開元皇帝聖
通神霊吾遂降社可辟衆邪鑒萬物秦皇之鏡無以加焉歌曰
盤龍々々隠於鏡中分野有象変化無窮興雲吐霧行雨生風
上清仙子来獻聖聰呂暉続て爐を移して五月五日揚子江心ゝ

おゆく波ちゞりゝ立めぐりゝ帝去ぬ帝これを長宝とし給ふ其後
天下旱の時水心鏡と凝陰殿ゝ安置し雨を祈ゝ須臾して甘雨大
小澍しゝ帝これより毎ゝ此鏡を愛ゝ水心鏡ゝ倣て一面
の鏡を造ゝ愛妃楊貴妃ゝ賜ひしゝ此鏡ゝ有ゝ其後安禄山の乱ゝ
楊貴妃馬嵬ゝ露と消し付此鏡の所在知ぬ成ぬ遠の星
霜を経て我国ゝ泊来し平政子これを得て秘蔵ゝ笑ゝ今ゝ至る
ゝ人の不思議ゝ近日の大旱ゝ高僧の祈ゝ甲斐ゝ有ゝ此鏡の故ゝ
よて甘雨降て民生の乏しきを潤ぬれば真の水ゝ鏡ゝ異ることなし爾ゝ
天下ゝ易ゝ宝ゝ有ゝ民の父母ゝ有ゝ持ゝ行ゝ汝ゝ妻孝の乃ゝ
家ゝ放し其去向を知ぬ人ゝ尋ぬ再び生ゝ故ゝ復ゝ及ぶ生ゝ此の宿志ゝ
遂ゝ人ゝ知ぬ霊鏡なれば我ゝ是ゝ祀ゝ祭ゝ又故ゝ有ゝ

故に復るべしと思ひて還し与へ給ひ、永く宝と兼器とぞうぶとさこそ
決ぶらふ処道理あれば拵房と倶に東国へ下り。憲実を校ふべし。切ふ
おかてに尚賞あるべしと太刀馬を賜りしかば。小栗年来の宿志一時に
一門他家の面目此上なく天へ喜び地に喜び感謝の涙を流す
孫生れ。かてれば家枝治郎大浦拵房を東国へ発向せんとて小栗助重を
偽供ふ助重に此序ぶり。模山安秀と対す。男の伝をも報らんと
想へば妻をも倶せんとて陳中へ女人伴ふことのうれらんと案じ煩ふ
折から美麗小左衛門を紛引く八陸山の旅館に来り。そなたの大ふ社び
急ぎて対面を。小左衛門と夫婦恙なく喜び祝し。后おのれ美濃ふ
後世しの東国の方を志ざし。下総に至り賊巣に宿り青柳の金
生涯の上を偽りて熊野ふ坐山せ。ちや主君浮ま婦を

そなの朋輩の人く京師に上りぬと。昨日京に生れ。何方ふ
知らぬ。公若しくふ京初童の口順るべ未世とうべ頼とあり小栗殿と
宮へ。生肉の人ふ庄司とあらひつる漢子の勇猛ふ八陸の山社井に伏る
毒蛇恐れ逃去とて一夜の大雨ふ日比さしも患ひし早魃の苦悩を
免れ沼ぶりして庄司の勇威ふ感ぜぬ。此度陸奥の
宮へ世ふ乱れ出ぬ。彼小栗殿の発達く。鎌倉対ふの勢
ふ加り近日東国へ発行あると。宮けば庄司も倶しまらん毒龍ぶ
思れ。勇あり必ず軍ふ勝世の中静謐ふなりぬんどふ
嘆しくさてこそ世ふ平ぶ。小左衛門ふ奇計を感賞し后助重函嶺の険難の附ふ思議ふ
聡天小分ふ還金武蔵ふ帰ふ延ふ。一色模山ふ生含。小分ふ主を

落さんとして討死。照天を夫を負ひて僅に脱れ出ふ。蒔沢の上人は還俗し
教ゆきと助主を坐行事みかき茅ゝて。熊野の本宮の湯に入て病苦愈の
こと。九人の郎等多勇すぐれ。京師より生池庄司が勇威ふるつて八稜の境
再び江ろうと又境の奇特あり。将軍家ふこ糸ゝ御免を蒙り。打房と
俱に故国へ赴くとして至りて語ふさとふ。小左衛門は伯父の死を嘆ぜ主の
高運をよろこび庄司が勇。境の奇特と感じられ斯こ后青柳を照天
姫ふひろひて去へりゝ迎へ妾まを墓ふあり。姫君ふとゝふもゝ。
此身の上死知らざれば生死の限りとなし。はるかに今とるべて甚罪逃るゝ処
あらざるは前よりあるも畏こて消も入ゝ伏れども父の仇人横山を怨ざる
そゝろに偏ふ此名を蒙りと。尚其上の恥ことは姫君仇討しまへ仇ふ
俱ゝそまいるへ此ゝ人ふ此ゝ恩ゝ君ゝ本意を遂ゝふ后ゝ怨人横山を。

一太刀怨ひやとなゝ。いかなる罪ふも伏ゝ仇ゝん。斯道理なれ。
願ゝふ恐れあれと。人の子ゝるの道とゝ公庭を傾けて伏へあけ
ゝふ。赤心ゝ述ゝふ。照天姫は身ふはきされ不便のゝとの
情ゝ。いそ前の非を咎ん。たゝ人世禄のものにもせ。知らざるべ。
小四郎をゝて想ゝ。まひておこゝとゝ父とゝふ下ざるの者はして深き恩を
受ゝふあゝ。たゝ仮初の君臣ゝ。甚子にあれがおぼゝけふ知りあり
とゝ礼をせん。まゝて知ゝ。ゝとなゝを。いゝで殺んゝやある。道ふ忠義と
いひ。汝が健気の孝とゝひ。比まれる本ゝれば。ふはして仇討ふ仇ん
ゝふ。兼ゝひねと云ゝ。夫ふうち對ひ。いゝよ。ゝ。ゝ。此年ゝと。
やゝ。ゝ助重臣。某もんを使して。男の仇ゝ横山を討ゝ。
ゝどいゝふせん陳中へ女を俱ゝて行んと。打房のゝ人と揮ゝ。

あり。たるが青柳もんそれ伴られ行んとらふとて幸なれ我軍陣の殿よつて。
彼を俱して来るべし。樸山を経て至るべ。我勢をとりて加勢せん。必選び出せ
よとらふて照天さまくふもいろど。青柳ますく喜びて。小栗が好意を感佩
せり。斯て小栗助手に発行の日ゆもうりしぶ美しく粧ひ打房と伴よ
京都を出。東国さしてぞ下りたりれ。これより前斥岡加次郎は主君の命を
受て。急ぎ下総に走り。豫て語らひ約しる。譜代恩顧の者ども中の
赴を告られば人々大きふ喜びいでや出陣の仕をせんとて我もくと立
夜叉分ぞ走上るほどゆ近江国番場の驛まして助重と行遭う。其
人くまを岩澤孫四郎長勝形原又七郎忠之竹谷与市忠次長沢孫兵衛
重治等助次郎助宗貞亦を比めとして。都合二百余人なり。小栗とその
人々叉紀伊の龍の翼を生せるごとく。威風凛々として。ひりられば足を見
りの天晴の勇ましと感せれりのこそ。ようひる。ふ青墓の驛なれ
万長は這回鎌倉の討手として。家扶打房小栗助重のあれ東山を下る
処に今日小栗が宿はものが家なるべしと豫て縣守より命ありほゆ驚き。
仇をもてづる小栗なれば禍ぞ身わからんと戦き恐れ慌忙を妻の小笹
諫めるる小栗どのこと尋ぞるふね人と前ふ云へは今日のぬくるん
とらふべなり。そを難面なしまくべ今さふ悔ふとも甲斐なし爾あれかの
人は義を辛んしのくべ奴家説まるくを一るあり。そは奈何となるべ小栗
どのは仮初ぞ一旦女婿となりたるさくめるふ正妻照天姫さろ家の
嬖婦とるて居りつれば。これらのことを以く嘆きやさぶいうたはくふさ報
くべくん。あまりよ心を悩しゆひそと慰む折ら。下婢暴然走来る。
さても不思議のことひぞや。去年去べし青柳只今彼所ゆ来り因君ふ

見へしとや。はといふ時小笹そハ不審きことかなと云ながら立て外方をうかゞふに。よしありげなる女肩輿を舁居多くの供人これを囲り。こハいかなる人ぞと猶伺ふうち青柳慌忙れ出て云ふ。内君別まゐらして后絶ては音聞も承らざりしに今爰にて光景をみて。いかばかりか喜ばしうは。妾がことさぞ怒らしましつべし。これ等も妾が意にあらず。早もつれて委く物語のはべらんを尽く聞へまゐらせん。さしあたりて云は今主と恃む人の。京都より吾妻に赴れ給ふなるが。今夜の宿は此家にと命せ給ふなれば。こゝろよく迎へ参らせよといふ。小笹は今荻助重の我家に宿を定めあれば。他人を宿まゐらすべくもあらぬを。青柳ふたゝび對ひて云へりそれハおことが身の上の難はまだしらね今夜の宿は索ずとも方は小栗殿の宿なるを知りてのことなれば又知らでの事にはや何まれ今宵の一宿をやはじめとともに同じれんと思へど今いふ方の話もあれバ。其順備して。いと開し。今は何方に居らるぞ其事でうまく聞へてよといふに青柳いらへ。吾妻に居て京師に上りまゐらせ吾妻路にまゐるなれバ。所を定らず云ひがたし。これらのことをも答へんにまげて今夜の宿をといふ時小笹はこれをかく関弁のうへ。白痴かな今いふごとく小栗どの宿りなれバ。他人を一人たりとも泊がたし彼おん方をはなる思ふ鎌倉討手のは大なれバ不礼にても叶ひがたふばいかなる咎を禀んも知れじといふ時肩輿の裡よりしてかの女咎を受まで。奴家身にかへ云解んと声をかけひふハ立出る小笹は驚きこれを見るに桃李却て恥ち芙蓉恥を含む顔色にて静くと立出し女そ威ありて猛からぬ武将の内君なりと思ひまれて。これゆもあらで平伏をなす時女性ハ青柳に命じ。小笹をも助け起し。×忘れやあはれ其のむかし此家にありし爨婦の小萩なるを知らずやといふに

錦を着て
照天姫
万長が
家に
宿る
あとずさり
てるて
とぶく
万てう

小盃の愕然と面を揚て窺ひうかゝふ昔あれ仏ねさぬうぐら。見そなはす
面ざしに景ぎりし玉を磨くのが斯やあらんとあり日くく。小萩るうらさ知り
はまど。甚威よおそれ今さらしれ。何といふべき言語なく。胸裏に畏み居る。
その射照天云生くれば奴家駿射も主とうのこ養ひを受し恩人。いうぐ
れのうふぐやと身を滅まぐ慌忙く。これを止めていひ生るれ前日のことは知
ざまぐ詮とぐ。今日既よ知るうぐ。いうぐ。それを做付くん。頑くは妾夫婦が
難面なしなるじとる。罪を免しまうじたるこれよ上ことは恩あるじ。たぐく
れ免あれしとまを合して伏拝む照天いうち笑ひこれ生の実ともゆめぐじ。
おことぐ女児は奴家ゆえ助重ふ遠ざうり。悪死よりとゆめつれば。おうく
怨こ思はんか。爾ゆとあるは我夫の勢を恐れくの故ぐうん。それ置こと怨。
まん。身のうぐ疎よあうぐ。ぐども。殿と奴家ぐ妹背。ぐうとゆ賢の比よりも親と

親とのぐ行ぐ。ぐうけ結びあれる赤縄ぐうぐ。不図ぐ家の乱れよ夫婦別て
所在を知くをを互ゆ憂を忍びしゆ。今又故ゆ復をこと。神や仏ゆ憐みて幼
ちうふうせのうらあ。不義姦行をうとりの。皇天いうく恵ぐうんうれらを
あても不義ぐうぬる。ぐ我精して怨みぐれさえてうふ倶したり青柳のこは這復ことと。
始終と物語折くう主万長八室の裡を拭び生姦絶のこは渾ぬいうでおんこを怨や
うん今さう思ふ浅猿やかる賤き生言をもれぐも拙て只利のこを思ぐうぬ。ぐうとは云
あうら貴人ぐて下婢ゆ追役使つる冥罰あて。我女児を悪ふ死ぐ。あうこを。
足も何ゆ思こうる欲よう。及ばぬ人を女婿として未の栄利ぐ「ぐうんりのこおりひ
ぐ。ぐは欲ぐの做事なれうるうくふ怨こう我よあるりのを世ゆも人ぐうも怨
ぐ。ぐのふいうゆ我妻ぐう。ぐう想ぐやとうのかるゆ。小盃まうこふ爾の。先非ぐ
悔く健きゆも悟くうぐ今よりて夫婦法ぐも容貌をかく前ぐう亡

女児が菩提。且我らが此年に作りし罪を亡して。後世のいとなみをこそ。いつも万長はたしん我が為ぐ甚だあれども。おとこぶ胸中。いつもあんと想きや賢に心あるべくとのある嬉しくもあるとと。夫婦先非を悔恨忍ち仏龍に。菩提の道に入りぬる。憐れみも又女とり。斯ることろかを表のうと賑やかく。小栗判官代の品入と。里長が主の立強ぐを照天姫いかをうかうる夫ぐら今日の徳倉討手の侍大ぜくん。その入ぶせるふなるふ。斯く居らんを礼ぶく公の使へも畏ところれば。奴家が別室にあんて後刺時を殺ひ夫ようと。おーとらがるの武士と思ひ。いつも小姫つ殺ひて命至極道理なり。いざうを。やと前に立照天姫と青柳の二人を一室に誘ひる行もあくまを小栗助重。近習の輩数十人武将て万長が許に入り。生絡の長ちを。のちち。それくの家に宿らしろ。ひとあの行ふと制じうしが各こを処を知て。

漸くに静かなりかなれば時に助重侍臣に命じ主を使ひ。いろ〳〵と。万長これを伺て。こは前の報をせんなるくん。今ふもやいろる憂目ふ逢ふらんと。地獄の餓鬼が閻王の。ほ苦ふ牽はこどくふて牽ふてらまこく廣座ふおそるくも躊躇。小栗これを遥みて。いろふ万長ふ応ま。我今夜こふ宿ること。汝が罪を糺さんなるり。今我いふところよく云解こと。武士甚罪を免ふ。汝利欲に迷ふるのあまり。照天と浮く娼婦ふせんと。ふ。照天姫を失ふと泣こと命に随ふどこれを怒ふく謀をめりけ。毒ふ。爨婦よ下こ日毎に七竈の火を焚こ。七荷の水に汲こ。七竈の草を苅こ。七桶の芋に洗うませり。是一人の力に及ぶ処ふくくや。こどあうそのの弁ふ。かこれを知り。甚任ふ堪ざふを罪と。強く倡婦ふせんなるりこふ照天姫。祝世音の仏力に泣て。さしも傲慢くき業を弁せりふ。ふ。凡なふこと

不実と久しく其労を慰さんと愚拙とやうん暴悪とやうんかゝる非道を
行ふと豈照天のそうくん尚我人の斯迄ばくくん曾てすこ我世代忍び
居し時不図こゝおすりしを女児が堂を溺る我をりて女婿わせんと強
ふるりしを辞まが禍忍ち身を及び宿志を果さと妨たくんと推ふ
ふるはゆしうかゝて我身の素性を借し。せ辞ぐこたとまり。邪非道を
行ひ人をして不義に墜しう。是此不仁不義あり。甚罪正ふ死ふ南
ふりと既ふ万長が罪を正さぐうこんくと。後背の紙門ふ開きく。
我夫ふ妻ふ社ふ人と云たく生るをうちそれが妻の照天書抑と小世代
傾ひ生まれり。小栗海りこうひざる我妻やおんを殿ふりふこと
べきぞ。此不ふいそ来ふるぞと問ぶ。照天答くいりけふ帝ふ
ロ殿ふはきふりぐし昨日人のいふを変ふ。明日ハ殿ふのふ宿り

ふりしいふる妻ふ体澤舘のうふ。万長が汗をさしのふふ正く罪を
糾さんとふはもふと精されが夫婦ふ助けふさとべく俄ふ長ふ
殿ふ前ふ出家ふ宿り最茶主夫婦ふも對面して夫婦の者が赤色
ぐと笑ふ体ふ。ふと殊勝ふも憐ふ殿ふくく長夫婦が余ふ助
ふさとてく。此雅ふくふ及べりと笑ふ小栗言語を正し。恐ふ彼その
仇人を助ふ人とかぐ心を狂ふと妻の心れを知ざれ。正ふ狂て怨ふ
報ひ。徳ふりて德ふ報ふと文ふもとぐふ。范睢が須賈ふむふ。
孫斉ふ石崇潘岳ふ報ひふ。これ恋を以くせり我又直きふりてせんと
まる体ふぐう止めふぞ。照天微笑。さうえのふ命實ふ道理ふれど主ふ
を罪ふふ奴家ふおふくく忍ひざる縁故の三ふ。推ふも主と。背ふ主を
受し恩是ふりふ又奴ふ長が許ふ居ふぶ。いで君ふ再舎せん此恩

二つより又女児花児奴家を怨みて死亡しぬ。爾且びをとゝのふ奴家ことを鎌倉どの〳〵へ上女児が仇討報ふべきを爾るさで居るは是此一の思我あり。それさへあるに長夫婦ことゝかくん意あれゝ此ものと仇讎と思し。夫奴が罪を免さゞゝ仇〳〵韓安国が獄史を免し文潘公が墓動を怨みざるへ人渾これを賢しとも今君発達門出る此夫婦のりのを助のゝこの寛仁を仇〳〵招くざるふ人帰伏せん強く夫奴と罪をひのゝ奴家一旦の恩を忘れ代ぐ〳〵と思ひこみて連日び助重漸く落ひ〳〵ざるゝ〳〵へのふりの〳〵我意を遂ひ僻とゝるとび夫奴が罪ハ免し〳〵さへいうと長夫奴今我い〳〵を〳〵く兼れ妻の奥〳〵も道理のるふ自ら前非を悔〳〵仏道ふ志をてう祈ぬ〳〵れば其の罪を免さゝるべく仏門へ入く女児が後世を汝が足まで作し悪業の消滅を祈べ〳〵とゝ多る万長夫奴ハさ〳〵こ照天姫。

青柳も喜ひのふを感涕せり。さても小栗いその翌日。青墓を立て鎌倉へ赴けハ照天も青柳を伴ひ長夫奴と共を別ち夫の殿を慕ひ出るりの長夫婦ゝ小栗ふ約せ〳〵く眷属財宝を捨て墨染の衣ものをゝ諸国の霊場を巡礼し。女児が菩提且ハ又生身の後世の営の外又他てけるのりゝ。悪ふ強ひ人善ふも法く〳〵手を引て道心堅固の知識とゝく終ふ大往生を遂ゝとゝるん且流小栗助手ハ旧悪を出らぬと長夫婦と免せしこと寛仁大度の大ゝる之と世ゝ普ゝ〳〵ゝ仁恵の恩ふ慕ひ旗下ふ純ゝふ勢多く勇威破竹のゝく〳〵ゝ〳〵ゝ東国の諸侯小栗不信ふる政康今川上総介紀忠武田三郎信重朝倉小太郎教景ホを始とし諸国の軍勢三万五千余騎ゝる軍家のゝへ下知ゝ〳〵ゝこゝとも家扶打房小栗助重ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ屈せ〳〵ゝ既ゝ〳〵ゝ勢五万余騎ふ及びゝれば強人岩中騒動し京勢只今責入ぬと。侍俗男女上ゝ下ゝ

りてゐる財雑物を西へ運び。東へ落し。南北へ走迷ひ。女童の泣叫ぶこと
芝を満。小路〻〻ふゞめく。左馬介敵出陣の留守なれば。然るべき武士も
なかりしほどに又遠と初まわらせ女房達とれをみて侮ると云ひ。弁方なく只一ト
ふさに集ひて。音を帝秋の虫なりて頼む草も赤枯て弱り果るなのうち
譬へん方もなかりけり。かゝる所に家枚憲実の討手の数[illegible]一色式部大輔俊秀。
同形部大輔対宗を属したる軍兵三千餘騎。いの河を落うせる人の家子
郎党僅に七十余騎。あぞ成ける。此小勢にてはかなはじと。持氏公の陣
ふゞ絶まる。持氏公はいとゞ〻〻しく。かゝる臆病りの味方はありて足なきひ。落
ぬるこそ宜れと宜されど。秋の夕暮の風ふく敬されし紅葉ふるの梢も枝も間
ばかりなる哀そもあくふ。されるる。斯てハ海倉のてもえ手ぬ武義の軍
高安寺の陣を引拂ひ。海倉あぞ還りまし。此時すでも結城打朝臣

一人も散さぞ忠義のやすしてそ人〻れば。持氏公も頼〻しく思。蜜ゆ人〻うち
我武運足すでとこそおぼめこ。対ふ替り命ゆ代らんと契り人〻も時運を窮
自家の安危を慮り。京軍ふ心をはしら退り。十ゆて八九こ。我るふ汝志氣
改めと傾運の我ふ忠義と。ゞゞとそ嘆〻れ。其忠公をうて頼べき一ゝ。今
楚歌を唱ゆの対ふ至まり。勲の軍して。雑人のまに死人の屍の上の恥辱ゆまこ
潔く自害せんとて。汝ハ我子義久と倶ゝて何処ゆも立忍び。対の至を俟て世を在
まゆよ是ぞ最期の暇と。涙ふこれて命る。持朝言治を正しこハ甲斐ゆ元命
を[illegible]のゆる。いくでも命と縮ふ。ゆらん其始より対ん存ぜるこ。山勢の
あゝん限りハ我言の聴ゆハと精〻。今日までハ一言をも伝人上を抑此回の乱ゆの
起ゆハ一色塗秀。家枚憲実を滅〻。君を怒ひ。ふ〻ゆ依国家の患と成
ぬ。[illegible]一色塗秀を勲氣あゝハ忽ち打軍家の怒解京都海倉ゆ

水奥の国中をうろうろんい安定と変ひ這回の討まに小栗助重まうりかこれい
前年は動きを無象し小栗満重が男児と君の近習ふひ者るれいもい
ろうろん彼い孝子ゆて父満重の死が君の心より発りしまあるぶ一色が強言
面倒ととて詮秀を討んぞろ〳〵ふ多〳〵ふ艱苦労心して君家の御兒を清一
とうんを基は使を遣り助重が陣よ参り。詮秀は敵きまのことを述君の赤心と
語りぬろぶ。喜んで京鎌倉のは和睦を整一国家安全祈ひきるる一〳〵。
尚一色が悪事をはえれぐまが持氏とてきとぢめて一色が悪行を思南り。
は後悔のあんきま色ぞう父ゆるれ。

小栗外伝巻之十四畢